

雑報

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 0
ページ	9 4 - 1 0 3
発行年	1911-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6214

雜誌

演說部報

「光陰は百代の過客なり」と喝破した詩人は過去の人たると共に此一語は常に清新な香を吾人に供給して居る様な感じがする。

回顧すると我神州は建國以來二千五百七十有一年。水師提督ペルリーの來航に覺めて開港互市のことありてより五十九年。北歐の強敵ロシアを破つて六年の歲月を經過して居る。

我部の創立に際して委員の宣言に「辯論は決して政治家の卵のみが弄ぶ可きはない。公の前に立ちて自己の思想を言ひ顯はすことは最も一般的である。智且識を普通せしむる點、眞理を通俗化する點に獨特の長あるもの云々」の語が有るか、余輩は此語以て遵奉するに足る。否常に此方針に適從せんことを期して居る。

遮莫「青年の自覺」てふ語はアツプ、ツーデイトの言だが、余輩の觀る所でも亦、筆に、意氣に、胞負に其餘珠を認むるものである。果然、昨年來の辯論界の活動は明治二十年前後の政論時代の浚活の面影か有る。關西の重鎮を以て鳴り、蘇峰の精を抜いた龍南の論壇の活氣や自ら知るに足る。實に吾人が希望を屬し、發達を希ふの意、蓋し過去の光榮なる歴史を辱しめず、現在及未來に一道の理想を認むる所に外以ならぬ。

年改まつて人心、自ら革る有ると共に余輩の言行は實賤躬行主義に依るを要する時新春第一の「瑞邦館の叫」は一月三十一日午後六時半より序幕を開かれた。

此日來夜の雨で午前中篠突く様なくで聊か心安からざるものがあつたが、幸午後は雨も止んで吾人の希望を満足させた。

此日、校長、江部、菊地の諸教授及、特に講演の御厄介を願ふた杉山、小野教授の來場を辱ふし「瑞邦館裡稀に見る盛況」常陰語を捨て「立錫の餘地なき盛會を呈した。蓋し、杉山教授の「大商店制度」と、

小野理學士の「千里眼」の偉彩を放てる者あるをや。即ち演題及辯士左の如し。

一、開會の辞

宮本 委員

二、活動

一、二、甲 宮田 章 吾君

一、寒月照枝花

一、二、甲 松本 榮五郎君

一、講話

法學士 杉山 教授

經濟學專攻の先生から近代の要求に生れた商業制度なるデバートメント、ストアの一時間餘の講演を聴く機會を得たのを感謝する

先、教授は左の六項に分類された。吾人は此の如き有益なる講演を吝れざりしを深く謝する。

一、デバートメント、ストアの意義(邦語にて大商店制度と唱ふ)

(イ) 大資本にて小賣業をなすこと

(ロ) 勸商場にては一家屋にて數多の小賣人の集合販賣なるも大商店制度にては一人ウンターチーマーにて大規模の小賣業をなすこと

(ハ) 現金主義にて數多の需用品を同一の場所にて賣捌くこと

(ニ) 當制度の地位

(イ) 商人を分類的ならしめて分業の長所を發揮せしむる地位にあり

(ロ) 小資本家壓倒の地位に立つ

(ハ) 小賣人の大打撃否滅亡の地位に陥らしむ。

三、消費組合との關係、消費組合は此制度の敵で同時に類似の點が多い。而も組合にありては單に組合員の同上に資し後者は

一般的で且組織の差違を見る。一方に消費組合の發展して大商店制度に對抗するは商業發達上歡迎すべしとする。

四、利益、(イ) 商業者に對しては資金の回收容易、(ロ) 消費者は安價に且隨意に購ひ得、(ハ) 生産は趣向、需要、適應を知るに便、

五、弊害、弊害の最も大なるものは、善良にして堪能なる理事を得るべし、

六、國家の此制度に對する政策、(略)

一、電鐵と都市の將來 一、三、甲 山本 俊 磨君
吾人は山本君の豊富な智識と凱切な觀察とに傾聴措く能はざる者である。先に臨港鐵道論、工業統一論等は君ならではと思はしめた。這回君說破して曰く「電鐵は文明の利器にして都市の發達にかゝりて之に存す」と引論該博一絲乱れずとは余一人の贅辞ではない。君は君獨特の進路を開拓して居る。吾人は君の將來の光彩を思ふと共に君の自重を希望するのである。

一、野猪に因つて得たる教訓 委員 石田 和吉君
君にして此演題ありと思はせた。君の剛健眞摯の煥

は野猪をして吃驚死に至らしめなければ止まない概がある。君の得たる教訓「野猪的に勇壯なれ、眠れる者は覺めよ。ストーブに憧憬する者は宜しくグラウンドに熱球の飛ぶに恥ぢよ。向上せよ。猛勇なれ」と叫ぶ所げに現代の一部の自覺を促す可く餘りあるを感ぜしめた。

一、講話

理學士 小野 教授

千里眼!!千里眼!!千里眼とは之も何者ぞ!!とは余輩の一個の疑惑であつた。此謎如何んど、解かざる可けんや。

蓋し千里眼の本元は我熊本だ。而して開祖清原千鶴子は果なく、自ら黄泉の道へ急いだ矢先、隨處に起れる疑問的現象は疑問的人物と相俟つて一層吾人のクエツションを深からしめた。先生は科學者として念寫、透視を全然否定せらるゝのではないらしい。否其可能の實驗に接したく渴望して居らるゝ一人だ是先生親しく丸龜に出張せられて現實に實驗者たられた所以と伺はれた。先生は現今に於ける千里眼を否定するのやむなき一人たらざるを得ざるを遺憾とす」と結論された。

一 講話

部 長 宇佐美 教授

部長紹介の辞 宮本委員は起て部長紹介の辞を述べて曰く

余は委員として新部長を諸君に御紹介するの光榮を有す。先の部長遠山先生は昨年夏期以來公私多忙の故を以て辭任の御希望を有せられたるも當時先生の猶在任を要する者多かりて引續き御指導を仰き居たるも昨冬以來先生の御健康の平かならざるを更に繁忙の加はるものあるに依つて數年先生の御靈粹を辱ふしたる我部は此に直接に先生の監督を放れざるべからざる事情に至れるは深く遺憾とす。

宇佐美先生は從來我部とは深き關係を有せられ間接に我部の發展に努力せられ居たるに這回遠山前部長の後を襲ふて直接に、はた間接に指導監督の勞を探らるに至りしは余等の本部の前途の爲め深く祝福する所とす。蓋我部の新部長を得て更に光輝を副ふるを祈のろと共に部員の一層自重せられん事を望む。

右遠山先生に對して深き感謝の意を表すると共に、新部長を御紹介す。

次で宇佐美部長は就任の挨拶ありて一同の奮勵を望まれて講話に移り聴衆一同是にチャームされて思はず快哉を叫ぶもあつた。

右終つて茶菓の響應あつて散會したのは午夜に近からんとして天を眺めば晴朗拭ふが如く徐ろに吹き來

る朔風に熱した頬を心地能く打たせて家路に就いた

(妄評多謝宮本生)

競争演説會(別項雜錄欄參照)

二月廿五日競争演説會は六時半より縣會議事堂に開かる多數の來賓と滿場の聴衆とによりて盛況を呈したり、十時閉會出演辯士左の如し(抽籤順)

一、開會の辭 演説部長 宇佐美 教授

二、力の人 二部三年甲 南種 康博君

三、我等のトーン 全乙 下田 克巳君

四、我神洲の美 一部三年甲 石田 和吉君

五、競争と進歩 三部三年 合屋友五郎君

六、世界政策と東洋 一部三年甲 宮本 義介君

七、自覺と苦悶 全 横手 貞武君

審査の結果左の如し

一、二等賞 一部三年甲 宮本 義介君

二、二等賞 全 横手 貞武君

三、三等賞 全 石田 和吉君

四、四等賞 (終り)

柔道部報

煙霞變隼として彩雲搖曳し、天に復活の光あれども地に氷霜相結ぶの時人は陶然として新酒に酔ひ、弱き者は恍惚として寒き宵の一刻を惜むこき、意氣ある健兒は雪の如き霜を踏んで濟美館裡に鐵腕を練ふ、之れ一月十五日以後三週日の寒稽古也。

二月十日午後三時より濟美館に於て寒稽古皆勤者に對して松浦校長及び白壁部長臨席の下にて賞狀の授與あり、次で鏡開きに移り何れも牛胃、馬腹を寛げて汁粉、雜煮を納むる元氣のすさまじさ。皆勤者及本數左の如し

三年間寒稽古皆勤者

平澤 幹 河田 茂

本年度皆勤者

百三十本 平澤 幹 百廿本 納富 重雄

百八十本 山津 善一 百十八本 寺崎 英雄

百十二本 米澤勝太郎 百十三本 宮田 章次

百〇三本 安藤 幹 百〇二本 河浪 清

百〇一本	宮崎 明夫	九十六本	岡村 連
九十五本	田代 萬藏	九十五本	石原 隆
九十三本	野守 繁人	九十三本	齋藤 勝敏
九十三本	小笹 猗夫	九十一本	吉賀 武雄
九十本	山領 季雄	九十本	江口 漢
八十九本	加來 卓郎	八十八本	高橋文太郎
八十八本	松本榮五郎	八十七本	山口二三四
八十五本	國吉 眞現	八十三本	中村 道方
八十五本	井上 孚鷹	八十二本	由布 惟智
七十六本	河田 茂	七十六本	大塚 良輔
七十六本	栗倉 有造		
精勤者			
百四十三本	村上 義臣	百十七本	久村 秀治
七十八本	里見 雄二	七十一本	影浦 尙親

弓術部報

部長乾先生廣島高師に榮轉の噂は遂に去年十二月に入つて事實として現はれた吾々は多年信賴してゐた先生を送らねばならぬ事となつたのである先生の部に對する熱誠なる御盡力は今更喋々するを要しない

直接其温容に接するを得た吾々は愛惜の情を禁ずる事が出来ないと同時に吾部に在りて忍び難き恨事である然し吾々はより以上に先生の榮轉を祝し且其幸福を祈るのである

乾先生の代りとして新たに木下先生を仰ぐことを得たのは吾々の大に光榮とし且幸福とする所である先生の斯道に御堪能なると熱心なる御指導は吾部前途の繁榮を下するに充分であると思ふ

射 初 式

四十四年一月二十一日午後三時より第二學期射初式を舉行した出席者は常になく少なかつた天氣が悪く一時は中止した爲であるそれでも十八人の出席者を得たのは嬉しかつた、金的が四立目に落ちた始末であるから五寸的競射は十射とした當日入賞者は左の如くである

金的 喜多島君

- | | | | |
|-----|------|-----|------|
| 第一等 | 下田君 | 第二等 | 村山君 |
| 第三等 | 坂本先生 | 第四等 | 喜多島君 |
| 第五等 | 大場君 | 第六等 | 吉川君 |
| 第七等 | 木下先生 | 第八等 | 江口君 |

第九等 山田君 第十等 川原君
 餘興源平は源の勝であつた、加入者左の如し



三月五日曇つては居たが静かな天氣で弓には良い天氣であつた
 午後一時から射納式を開いたメタルが出るので出席者は非常に多く二十餘名に達した、今日は射初式とは反對に金的が二射目に落ちたので競射は六寸的三十射と見た、援群の功を立てた者はなかつたが一体によく中つて七本三人六本五人、五本一人、四本一人、三本二人、一本四人、と云ふやうな風である
 入賞者は左の通り、

第十等 秋岡君、第二等 喜多島君

第三等 山内君、第四等 金澤君
 第五等 江副君、第六等 岡本君
 第七等 村山君、第八等 塚本君
 第九等 吉川君、第十等 坂本先生
 餘興は時既に薄暮となつたので残念ながらも省いた、左の如く進級す(三月五日)

五級
 吉川義之 坂田静夫 井上孚麿 尾藤憲祐
 岡本 紉

六級
 木村介次 佐伯顯三 森 純造 三村正堯
 塚本佐悦 川邊謙司

英法^{二年}第一回辯論會々報

第一部二年甲一組の組織にかゝる辯論會は其發會式を兼ね第一例會を二月八日午後三時半より生徒集會所に開く氣鋭の雄辯家を會員とせる全會は頗る盛會を極めたり

當日登壇辨士は左の如し
 一、開會の辭
 近藤 駿 介君

一、協心成美

阿部 正胤君

二、國民精神を論ず

坂垣 政治君

三、We must be ambitious.

前谷 廣太郎君

四、十字架

小林 秀一郎君

五、海と文學

謝花 寛濟君

六、軟化と南下

菊地 行夫君

七、人生の意義

松本 榮五郎君

八、現代の思潮

篠崎 良造君

右終りて會員某君の眞摯なる講評あり次で茶菓を饗し快哉を叫んで一同散會せしは金峰山に暮雲棚引く頃なりき

同第二回辯論會

三月九日午後三時より第二回の辯論會を生徒集會所に開く、辯士各々獨特の快辯をふるひて、舌端雲を湧かし口角霧を吐くや、聞く者ために恍として酔へるが如し、本日は特に江部教授の出席ありて辯論につきての講話は吾人のために利するところ多りき。

開會辭

板垣 政治君

亡國論

小林 秀一郎君

紅の血潮

大野 熊雄君

不當なる斷案

菊地 行夫君

蜀魂

謝花 寛齊君

脊驅せる思潮

薩 埴 匡君

若き日の誇

江 橋 修君

辯論につき

江 部 教授

龍南會委員改選

二月四日(土)午後一時より化學教室に於て四十四年度龍南會委員の改選ありき當選者左の如し

總務委員

近藤 駿介

立花 貫一郎

演說部

樋口 芳苞

山村 喜久茂

雜誌部

江口 渙

古賀 行義

吉鹿 善郎

藤山 一雄

小田 數雄

劍道部

大野 熊雄

大場 獸之助

柔道部

鈴木 廣武

村上 義臣

弓術部

喜多島 藤三郎

江副 民也

野球部

原 隼人

山本 義秋

庭球部

大場 俊太郎

宮川 量

端艇部(一部)石川 豊記(二部)田淵 壽郎

(三部)佐藤 清熊

水泳部 細川 隆志 榊原政三郎

習學寮委員改選

第三學期に於ける幹事及炊事委員長改選の結果左の如し

幹事

一部 山村喜久茂

二部 進來要

三部 執行作藏

炊事委員長

一部 篠崎良造

二部 中島修七

三部 岩永仁雄

標雪 未肯向北風
殉國劍傳自乃父

信仰とは吾人の生くる所以の道人生に意義あらしむるものとトルストイ曰く「信仰は生活の力也」と、如何にも信仰は力也。たゞこの力の一字に神秘の三字を加へて更に其意義を精核ならしめよ、信仰とは畢竟神秘力の謂であらずや。神秘的なき信仰は空名のみ。神秘とは迷信にあらずる也

●第廿一回自炊記念日の寮歌左の如し

寮 歌(明治四十四年)

ハ調	2/4	5	5	5	5	6	5	3	1	1.	1.	2	1	6	0
		タ	マ	チ	ー	ア	ザ	ム	ク	ジュン	ン	ケ	ツ	ノ	
		5.	5	5	5	6.	5	3	5	2.	2	3	2	1	0
		イ	キ	レ	イ	ロ	ワ	ト	ー	コ	ル	ト	ゴ	ロ	
		1.	1	5	5	1.	2	3	3	2.	1	6	1	5	0
		チ	シ	ホ	ー	タ	カ	ナ	ル	セ	イ	ミュン	ン	ノ	
		3.	3	2	1	6.	6	5	3	2.	1	3	2	1	0
		ム	子	ニ	ー	リ	サ	ウ	ノ	ア	ク	ト	コ	ロ	
		2.	2	2	2	3.	2	1	2	3.	5	6	1	2	0
		キ	ハ	タ	ル	ジ	チ	ノ	ー	シ	ロ	ナ	リ	テ	
		3.	3	2	1	6.	6	1	6	5.	1	3	2	1	0
		ト	ナ	ン	ノ	ケ	ー	ン	ジ	コ	モ	リ	タ	リ	

- 一、玉をあざむく純潔の
血潮高鳴る青春の
巍々たる自治の城成りて
三千載のいにしへの
世は徒に斥鷃の
覺醒の劍振ふべき
薔薇の香高き西歐の
花燎爛の春の夢
銀波を蹴つて天明の
利を射る眼底に注ぎ
天馬を驅つて空をゆく
紅塵いかに立ち舞ふも
春武夫原の曉の空
城壁焼る松が枝に
萌ゆる芝氈の若緑
瑞雲はゆる阿蘇の峯
友とし立てる光榮の
梅が香薫る窓に倚り
- 意氣玲瓏と凝るところ
胸に理想の湧くところ
圖南の健兒籠りたり
純朴剛毅今いづこ
太平謠ふ聲高し
腕磨かずや健男兒
文の潮の寄せしより
亂れてこゝに安からず
彼岸にすゝめ健男兒
妖雲暗く罩むる時
高き理想は我にあり
汚れは寄せし自治の城
仰ぐ蒼穹雲もなく
千古に剛き響あり
希望の色を君見すや
連波輝く筑紫瀉
歴史はこゝに二十一
いざ高誦せむ祝の歌

六、

五、

四、

三、

二、

變口調 $\frac{2}{4}$

1. $\frac{1}{ギ}$	1. $\frac{1}{ヨ}$	1. $\frac{1}{ケ}$	1. $\frac{1}{レ}$	1. $\frac{1}{ン}$	5. $\frac{5}{ハ}$	5. $\frac{5}{ナ}$	6. $\frac{6}{ナ}$	1. $\frac{1}{ー}$	2. $\frac{2}{ツ}$	2. $\frac{2}{ミ}$	2. $\frac{2}{ノ}$	2. $\frac{2}{セ}$	2. $\frac{2}{テ}$	0
3. $\frac{3}{カ}$	3. $\frac{3}{ス}$	2. $\frac{2}{ミ}$	1. $\frac{1}{ウ}$		6. $\frac{6}{イ}$	6. $\frac{6}{ー}$	1. $\frac{1}{テ}$	6. $\frac{6}{シ}$	5. $\frac{5}{ハ}$	5. $\frac{5}{ル}$	5. $\frac{5}{ノ}$	5. $\frac{5}{カ}$	5. $\frac{5}{ミ}$	0
3. $\frac{3}{ヒ}$	3. $\frac{3}{ク}$	3. $\frac{3}{ギ}$	3. $\frac{3}{ン}$		5. $\frac{5}{キ}$	3. $\frac{3}{ユ}$	1. $\frac{1}{ノ}$	2. $\frac{2}{ー}$	3. $\frac{3}{カ}$	5. $\frac{5}{ゲ}$	6. $\frac{6}{オ}$	6. $\frac{6}{チ}$	6. $\frac{6}{テ}$	0
1. $\frac{1}{ア}$	1. $\frac{1}{ケ}$	5. $\frac{5}{ゴ}$	3. $\frac{3}{ノ}$		1. $\frac{1}{ニ}$	2. $\frac{2}{ホ}$	3. $\frac{3}{フ}$	3. $\frac{3}{ー}$	2. $\frac{2}{サ}$	1. $\frac{1}{ン}$	6. $\frac{6}{リ}$	6. $\frac{6}{ウ}$	5. $\frac{5}{ノ}$	0
3. $\frac{3}{ソ}$	3. $\frac{3}{バ}$	3. $\frac{3}{タ}$	3. $\frac{3}{ツ}$		5. $\frac{5}{ス}$	5. $\frac{5}{ガ}$	3. $\frac{3}{タ}$	1. $\frac{1}{ー}$	2. $\frac{2}{ア}$	2. $\frac{2}{フ}$	3. $\frac{3}{ギ}$	5. $\frac{5}{テ}$	6. $\frac{6}{ハ}$	0
5. $\frac{5}{ワ}$	5. $\frac{5}{カ}$	6. $\frac{6}{キ}$	7. $\frac{7}{ー}$		1. $\frac{1}{チ}$	1. $\frac{1}{シ}$	5. $\frac{5}{ホ}$	5. $\frac{5}{ノ}$	3. $\frac{3}{ガ}$	1. $\frac{1}{ド}$	2. $\frac{2}{ル}$	2. $\frac{2}{カ}$	1. $\frac{1}{ナ}$	0

寮

歌(明治四十四年)

- 一、玉簫花を積みひのせて
引く銀弓の影落ちて
聳つ姿仰いで
龍南國をなしてより
荒ぶ濁世の寒潮の
剛健の氣は今も尙
三、關山遠き雁金に
秋や一度野に立ちて
憂國の血は高鳴りて
四、皇祖は遺訓炳として
率士の濱も悉く
咲いて萬朶の櫻花
五、見よ我楯は天空の
文化の流ひたすらに
愛と平和は永久に
六、今武夫原の草萌ねて
斯文の姿虹の輪に
橄欖の風光あり
- 霞を出でし春の神
曙句ふ三寮の
若き血潮の躍る哉
星霜茲に二十一
寄せて碎けて散る毎
傳へて燃えて火の如し
慕郷の思繁くとも
清冽菊の香に酔へば
玉露は凍る斬魔劍
普天の下に照る所
歴史の跡を刻みては
光榮の影深み行く
白き光を返したる
東亞の岸を洗ひては
楯の面に輝かん
春乾坤の夕まぐれ
自覺の聲響きては
柏葉の影薫あり